

『地方自治論——2 つの自律性のはざままで』

(M.I.・公務員)

『地方自治論』という書名から、地方自治に関する難しい論文が並んでいるのではないかと思っていたのだが、いい意味で裏切られた。本書は、図表やコラムによって、わかりやすく地方自治の現状を解説してくれ、それだけでなく、それぞれの分野における議論や学説なども紹介してくれている。私は地方公務員だが、掲載されていた資料が早速仕事で役立ったし、公務員や学生だけでなく、住民の皆さんにとっても地方自治の現状を理解するうえで、役立つテキストなのではないだろうか。

さて、本書では、都道府県や市区町村といった地方政府の主体である首長、議会、地方公務員について観察したうえで、副題のとおり、2 つの自律性に焦点を当てながら、地方自治の現状について分析している。自律性の1 つは、地域社会に対する地方政府の自律性であり、もう1 つは、中央政府に対する地方政府の自律性だ。

地方自治の本旨といえば、住民自治と団体自治だが、2 つの自律性は、地方自治の本旨を再認識させてくれる。地方自治のあり方について考えるにも、格好のテキストだ。できれば、2 つの自律性で、もっと多様な分野の分析をしてみてもらいたい。応用編的な続編の出版を期待している。

『法学教室』2018年5月号(No.452)掲載「Reader's Voice」より